

第2回 信濃川が造った越後平野と風景
～ファインダー越しに見た信濃川の恩恵～

日 時：平成17年11月10日（木） 18：00～20：00

会 場：だいしホール（新潟市）

ゲスト：弓納持福夫氏（カメラマン・新潟県写真家協会会長）

ホスト：阿達秀昭氏（新潟日報社編集委員）

（司 会）：皆様、大変お待たせいたしました。ただ今より、「我ら信濃川を愛する～信濃川自由大学」を開校いたします。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。私、本日の司会進行を務めさせていただきます、FM KENTOパーソナリティの坂井英里子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校し、この新潟会場で第2回目の開催となります。来年5月まで毎月1回、各地でこの信濃川自由大学が開催され、毎回、信濃川にゆかりのあるゲストの方々からさまざまなお話をお聞きします。皆様、お時間がありましたら、是非、ご参加ください。お待ちしております。

それでは、はじめに主催者を代表いたしまして、信濃川下流河川事務所所長松井健一よりご挨拶申し上げます。

（松 井）：ただ今、ご紹介いただきました信濃川下流河川事務所の事務所長をしております松井と申します。本日は大変お忙しいところ、この信濃川自由大学にご参加いただきまして、大変ありがとうございます。先ほど紹介がありましたように、先月、この信濃川自由大学が開校いたしまして、今日で2回目ということでございます。今日は写真家の弓納持先生のお話を中心に、新潟日報の阿達編集委員との対談という形で進めさせていただきたいと思っております。

私は、写真は素人なのですがけれども、私の事務所でも写真コンクールというのをやっております、実は昨日も弓納持先生にお世話になったのですが、少し写真のことを勉強させていただいているとか、写真の愛好家の方というのはプロの方ですが、こういう見方をしているのかと、全体の構図の考え方とか動く人とか、船とか鳥とか、太陽とか月とか、そういうものが動く中でシャッターチャンスはどういうふうにとらえるかというのを、私たちが気づかないような観点でものを見ていらっしやるのだなということをしつづ勉強させていただいているところなのですが、今日、ご参加の皆様もそういったことを少しでも感じていただいで、これから信濃川を見る新しい観点のようなものを築いていただければ、ものの見方も豊かになって楽しいことになるのではないかなと私も主催者として期待しているところがございますので、十分に楽しんでいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。簡単でございますけれども、ご挨拶とさせていただきます。

（司 会）：ありがとうございました。続きまして、本日の開催地である新潟市都市整備局長・鎌田秀一様よりご挨拶をいただきます。

（鎌 田）：今、ご紹介いただきました新潟市都市整備局長の鎌田と申します。本来であれば、新潟市長の篠田がまいってご挨拶するべきところでございますが、本日、公務でどうしても出席できないということで、

私、代理でご挨拶させていただきます。

今日、この信濃川自由大学が開校ということでございますが、信濃川というのは新潟市にとって本当に大切な川でございます。新しくこれから合併して政令市になろうとする新潟市なのですが、政令市になる新潟市にとって大きな目標がいくつかあるわけがございます。その一つは、日本海政令市ということで、日本海側で初めての政令市になる。それにあたって大事なものは、やはり港です。港というのは、これから世界に向かっての窓口になる、日本海の拠点としての位置づけとして港というのが大事だと、もう一つは、田園型政令市ということで、日本の政令市の中でもかつてないほど大きな田園を持った政令市、この田園と港、二つをもたらしてくれているのが信濃川です。信濃川の大きな流れが港をつくってくれております。そして、これまで江戸時代も北前航路の最大の寄港地として発展してきた。そして、幕末開港にあたっては開港5港の一つとなった港、これをつくってくれた信濃川、そして、広大な越後平野をつくってくれた信濃川、この大きな信濃川、母なる信濃川を新潟市としては大事にしていきたい、皆様も是非、この信濃川を愛していただきたいと思っております。今回、こういった形で信濃川自由大学という大学が開かれて、信濃川が皆さんにとって身近なものとしていろいろな意味でアピールできる、知っていただける機会をつくっていただけたというのは、新潟市として本当にうれしい限りでございます。この企画をしていただきました北陸地方整備局さんには、本当に感謝を申し上げたいと思います。そして、今日は先ほど所長からご紹介がありましたように、弓納持先生から写真家としての視点からいろいろお話を伺えるということで、私もいつも同じ場所しか見る機会がないのですけれども、いろいろな視点から信濃川の魅力を語っていただけるのではないかと期待しております。

最後に、この大学がこれからも連載で開催されるということでございますので、今後も多くの方に参加していただいて、信濃川を知っていただくいい機会になっていただきたいとご祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。本当に今日はありがとうございます。

(司 会)：ありがとうございます。それでは、第2回講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは、「信濃川がつくった越後平野と風景～ファインダー越しに見た信濃川の恩恵」です。本日は、ゲストスピーカーにカメラマンで、新潟県写真家協会長でいらっしゃいます弓納持福夫先生をお迎えしています。ホストは、新潟日報社編集委員の阿達秀昭が務めさせていただきます。

まず、お二人のプロフィールをご紹介させていただきます。本日の講師の弓納持福夫先生をご紹介します。弓納持先生は吉川町ご出身で、昭和32年、日本写真専門学校をご卒業、その後、新潟映画社でテレビニュースカメラマンとしてご活躍されました。昭和39年6月16日、27歳の時に新潟地震を体験されました。弓納持先生は地震直後、空撮を行うため新潟空港に降り、液状化の瞬間や昭和大橋の落橋などを撮影、ニューヨークタイムズの1面を飾りました。昭和49年、日本写真家協会、日本広告写真家協会に入会、昭和60年から写真集「豪農の館」「信濃川」「はさ木」など多数の写真集を出版されております。今年、古希を迎えられる弓納持先生は、昭和59年から平成17年まで毎年東京銀座にあります鳩居堂6階の京セラコンタックスサロンにて、新潟の情景作品を紹介する個展を開催されております。信濃川自由大学のチラシや広告に使われております写真は、弓納持先生が十日町市で撮影されたものです。

続きまして、本日の進行役であります阿達秀昭編集委員をご紹介します。阿達編集委員は新潟市ご出身で、昭和51年、早稲田大学法学部をご卒業後、新潟日報社にご入社されました。その後、記者として村上支局、六日町支局委員を経て、フリーキャップとして東京支社報道部キャップ、県政キャップ、デスクとして1面デスク、社会面デスク、長岡支社報道部デスク、編集本部デスクを歴任されました。平成16年に学芸部代理兼編集委員を務められ、平成17年より学芸部長兼編集委員とし

てご活躍されております。

それでは、弓納持先生、阿達編集委員をお迎えいたします。皆様、大きな拍手でお迎えください。本日、皆さんにご覧いただく写真が収められています写真集を弓納持先生の方からご紹介させていただきますので、よろしく願いいたします。

(弓納持) : どんな本に収められているのか、皆さん、すべての本が絶版しておりますので、こんな本だというのをちょっとお見せしようと思います。

「豪農の館」、この本は相当前に出されて2万円する本でした。でも、半年ぐらいで売れてしまった。何と言うのでしょうか、旧地主さんの家を覗いてみたい気持ちがいっぱい働いて、すぐ売れたのではないかと思います。その後、「信濃川」「はさ木」、それから新潟のもう一本の大河・阿賀野川を撮った「尾瀬下流」という本、それから良寛さんが見たであろう新潟の風景に良寛さんがうたった詩を脇に添えた「良寛・歌詠」という本、それから新潟県内で展開する日本画的な風景を撮った「新潟・四季茫茫」という中の映像ですが、今日はこの前の3部の部分をお見せしたいと思っております。

(阿 達) : よろしく願いいたします。本来、トーク的なものが普通なのかもしれませんが、せっかく今日はゲストに先生をお迎えしておりますので、それこそ古希を迎えるにあたって、まだまだお元気でいらっしゃるから、これまでいっぱい撮っている写真を皆さんにご紹介しようと、特にカメラマンを志願してからざっと50年余、撮りためた写真のほんの一部ですけれども、今お話があったとおり新潟県ならではの、あるいは先生が新潟県を愛する中で「はさ木」と、今日のメインテーマの信濃川、それから豪農の館、それぞれ信濃川にゆかりのあるもの、信濃川の恵みから由来するものを時間の許す限り映像で紹介したいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

それで、本来、この舞台の上でやらなければいけないのでしょうかけれども、映す都合上、私ども、暗い中ですが、座席の方に座らせてもらいますので、よろしく願いいたします。それから、一番最後に皆様からご質問等を受けたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。それでは、これから座席の方にまいりますので、ごゆっくり堪能してください。

(弓納持) : 大学という名前がついておりますが、是非、ここに出てくる映像で和んでいただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

(司 会) : 本日は、弓納持先生の撮影した写真の数々を前方スクリーンに映しながら、信濃川の魅力についてお話ししていただきます。映像操作がございまして、お二人には会場後方の客席からお話しいただくこととなりますが、皆様もお二人と同じ視点で写真ご覧いただき、トークをお楽しみいただければと思います。ここからは、進行役の阿達編集委員、よろしく願いいたします。

(阿 達) : つまるところ、きれいな写真オンパレードという格好にしたいとは思っているのですが、先ほど司会者の方からお話があったとおり、世界に発表した新潟地震の大スクープ写真、たまたま発生時に新潟空港におられた先生が、当然のことながら新潟空港周辺の、それまで稀に世界でも例のなかった液状化現象をとって離陸しただけではなくて、空からの信濃川を含めた新潟の惨状をとらえておりますので、それも最初に紹介していきたいと思っております。それについては、動く画面で撮った部分がありまして、これまでもテレビ等でご覧になっておられる方がいるかと思っておりますけれども、静止画で皆様に紹介するのが、ある面では本邦初公開かなという貴重なフィルムになっておりますので、よろしく拝見されてください。

(阿 達) : これから本題に入らせていただきます。信濃川、皆さんご存じでしょうけれども、日本一の長さを誇ります。367キロメートル、流域面積が約12,000平方キロメートル、これは利根川、石狩川に次いで3番目ですが、それだけ大きな川です。流れ込む川が800本くらい、流域には300万人が住むと言われております。私は新潟市に今回入れさせてもらいましたけれども、一番はじっこの小須戸町に

今住んでおります。毎朝、新潟日報までの通勤、約 20 キロなのですけれども、ずっと信濃川の右岸を通ってきます。ちょうど今はサケの遡上の時期で、素敵な秋の風物詩と言えるかもしれません。春夏秋冬、先生がお撮りになっている様々な信濃川、四季折々のいろいろな姿、素顔を見せます。これをわずか 20 キロではなくて、それこそ河口の新潟西港から山梨、埼玉、長野の 3 県に位置する甲武信岳、これは源流なのですけれども、ここまで辿れば、もっといろいろな顔が見られるだろうということです。今、画面とは違ってかわって清らかな源流、それから急峻な上、中流付近、そして越後平野を滔々と流れる下流付近と、川沿いには多種多様な動植物が生息し、太古の昔から人々が佇んできました。そこには伝説もあり、祭りもあり、信仰も育まれてきました。住民たちは、信濃川がもたらす恵みを享受し、豊かな実りを手に入れながら生活を営んできました。古来から魚や貝殻を採取し、鳥を撃ち、鹿を追いかけ、米を作り、船で物を運び、信濃川を上り下りしながら人、物、文化、産業が交流を続けてきました。信濃川・母なる大河、心のふるさと、癒しの風景、これは先生が普段言葉にされております、信濃川に対する思いです。一方で、洪水と治水、つまり氾濫する川と、それを抑えようという大自然と人間の闘いの歴史でもありました。

今日は信濃川自由大学、第 2 回講座です。テーマは信濃川が作った越後平野と風景、先生がお撮りになったファインダー越しに見た信濃川の恩恵がテーマです。弓納持さんが普段見慣れている何気ない景色でも、季節や時間ではっと息を呑むような美しい瞬間が必ずあると、その瞬間こそ写真でなくては表現でき得ないのではないかと指摘しています。そして、信濃川については、歴史、文化など数え切れないほどのテーマを包含している。そして、信濃川は新潟の中にある穏やかでやさしい風景の代表ではないかと話されています。ご出身は、先ほど紹介があったように上越市吉川区、旧吉川町ですが、上越の地域には流れていませんけれども、越後平野に恵みをもたらした母なる川と先生は称していらっしゃいます。そして、母なる川と言えば、仕事に行き詰まると、必ず信濃川を見に行くそうです。すると、決まってほほえんで迎えてくれるのが信濃川だそうです。信濃川と信濃川がもたらした恵みの風景を弓納持先生が撮影された動画、あるいは静止画、映像を通して拝見しながら講座を進めていきたいと思えます。それでは先生、よろしく願いいたします。途中になりましたけれども、申し訳ございませんでした。私の不手際です。

(弓納持)：今、もう一回、液状化の瞬間をお見せします。なぜ今回、液状化かと申しますと、これも新潟市というのは信濃川の河口にあって、そこでできた街ということになりますと、新潟地震の時でも大変な液状化が起きたわけです。幸い、私は新潟空港にいまして、今ではいくらでも、どなたでも VTR で撮ることができるでしょうけれども、たまたま 8 ミリカメラを持っておりましたので、動く映像が撮れております。これは 8 ミリフィルムです。8 ミリフィルムの画面の大きさというのは 4 ミリ、5 ミリです。そこからこういうふうに大きくしておりますので、ちょっと見にくいかなと思います。最初、動く映像を見ていただいた後に、それをもう一回ブローアップしてフィルムに置き換えて、皆さんに液状化というのはどんなものかコマ止めにしてお見せしようかなと思っております。その時に新潟周辺、特に信濃川周辺がどのような液状化の影響を受けたのかという映像も、併せて見ていただこうかなと思っております。では、お願いします。

最初、これが液状化ということは全然分からないので、水道管か何かが破裂したのだらうと思って撮っておりました。これはすぐ後ろで昭和石油が煙を噴いたという証拠写真です。あそこに写っておりますセスナで、私が直後に新潟を離陸しております。この時点で約 1 階の半分くらいは水に浸っております。このビルは静かに沈下しております。止めてもらって結構です。

今、液状化を撮影したのはこの場所です。今の新しい空港ターミナルはここにあります。昔、ここにあつて、ここにあつて、ここにあつたと 3 回変わっておりますので、一番最初の空港ターミナルで

す。私はここにいて、この空港ビルが沈む状況を撮っているわけです。場所にしますと、私が立っていた場所はここです。ここからこの空港ビルを撮影しております。この時点でも地震後、30分以上たった時点での航空写真なものですから、これは全部液状化した水の状況です。

これが、先ほど出ておりました空港ビルがまだ沈み始めている頃です。なぜこれが撮れたかと言いますと、地震があって、この中から皆さんが飛び出して逃げてきました。揺れている時というのは、私もこの現場に立っていることができず、地面に這いつくばっております。でも、何か写真に撮りたいと思ってカメラを構えるのですが、カメラというのも最初は8ミリカメラではなくて、当時、新聞社や何かが使うスピードグラフィックという9センチ、12センチの大きさに写るフィルムのカメラを持ち上げて、何か撮ろうとして這いつくばりながら周りを見回したのですけれども、ただ揺れるだけで、映像にすることはできなかったわけです。その時に、それがおそらく1分か2分たってからだと思います。ここから飛び出した人たちが、自分たちが飛び出した空港ビルを振り返った時に、「ビルが沈んでいるぞ」と、どなたかが声を出したのです。それなら写真に撮れると思って、8ミリを持つ前に2枚だけ、ここでその大きいカメラでシャッターを切っております。その写真は今ありません。そうだ、このビルが動いているなら、8ミリの動く映像で撮るべきだと思って8ミリカメラを持って、これを撮影し始めました。ここに出てくる数字は、撮影を始めてから2秒ということです。ですから、2分2秒たってからと思って見てください。



まず、一部分を映して、それからビルが静かに沈んでいく全体を映したのですが、全体を映している時には、このビルの沈み方が緩くて分からなかった。それで、ここにズームアップしていくわけです。これはズームの途中の映像です。そうすると、飛行機に乗るために人が出入りする部分から5秒ちょっと過ぎてから、ここからドカーンと水が出てくるわけです。先ほど言ったとおり、これが液状化の水ということは全然頭がないわけで、水道管か何かが破裂したんだと、切れたのだと思って、それでもこれはえらいことが起きている、ビルが沈みながら水を噴いていると、この状況は絶対正確に撮ろうと思って、ずっと回しているわけです。

この辺はあわてて撮っているものですから、カメラがぶれています。



この時点では、まだ1か所からしか水は出ておりません。しかし、次の瞬間、このあたりからも出てきています。約10秒くらいたってから、最初ここから出て、10秒後にここからも吹き出してきたと。動く映像では、こういう細かい説明はできないのですけれども、これがやや終息しはじめて、次ここが出始めていると。この瞬間でもこのビルは、沈んでいっています。こっちも、こっちもやや終息し始めます。これは完全に終息しました。約20秒後くらいに、すーっと終わってしまったのです。直ったのだと思って、それでもカメラを回し続けると、今度は少しずつ違うところから出てきます。先ほど言った、水が噴き出して、おそらく揺れて液状化が始まって30秒ですから、約3分後くらいに昭和石油からの煙が上がっていたと、ちょうどこのビルの後ろの遠くに昭和石油の最初に火を噴いたタンクがあったものですから、あれはおそらく揺れたすぐに火が出たのだらうということは、これ

から読み取れるのではなかろうかと思えます。

実は、先ほどの紹介の中で、BSNがテレビ放送を始めたときに3年ほどニュースカメラマンをやっていたので、何をどう撮ればいいのかと、1か所だけではなしに、その周りで何が起きているかということも、もちろんニュースとしてはカット割りでも撮るわけです。そういう学習をしていたものですから、ビルだけではなしにその脇、これは全部液状化して噴いている水、これはそこから逃げていく人たち、これはタラップです。これは液状化して流れ出した水です。振り返って、空港のエプロンをこの水がずっと流れていきます。人が逃げまどっています。私は、この飛行機で脱出するわけです。実はこの時点で私の膝以上、腿くらいまで私は水に浸かって撮影をしていました。ということは、脇にカメラを全部おいていたのですが、あっ、しまった、水に全部浸かってしまったらと思うのですが、幸いその時、脇にアシスタントがいてくれて、全部飛行機に機材を積んでくれました。私が夢中になって撮影をしている時に、この飛行機のパイロットが、「弓納持君、こんなところにいたら死んでしまう、空へ脱出するぞ」と言って迎えに来てくれるわけです。私も我に返って、この飛行機に飛び乗って上がっていくわけです。でも、その前にまだ回しています。水がずんずん広がっていきます。もう一回、空港ビルの方を振り返ると、先ほどはこのフェンスの向こう側から水が出ていました。今は、このフェンスのこっち側からも水が出ています。あらゆるところから水が出た。この後、この空港を後にするわけです。

でも、この話だけで1時間は終わってしまうのですが、そういうわけにはいきませんので、簡単にしますと、ここから飛行機はこここのところを通過して、この滑走路を使って離陸していきます。その中にはすごいドラマがあるのですが、今日は省略いたします。どう見ても、液状化の一番激しいところに私が立っていたことだけは間違いありません。それから、ここから飛行機がこう出て、離陸していったというの、奇跡の何ものでもないと思うのです。水の中を飛行機が通ってくるわけですから、ひび割れしていたら、軽自動車ぐらいの車輪しかないものですから、ガクンとくればそれでおしまいだったのですが、幸いここから飛び上がることができました。飛び上がってすぐ目に飛び込んできたのは、これです。飛び上がった時にパイロットが私に、「弓納持君、こんなチャンスは二度とないのだ。この飛行機には満タンガソリンが入っている。写真を撮りまくってくれ」と。私ももちろんニュースをやってきた男ですから、すごい現象にぶつかっている。でも、俺だけ空に脱出して生きてしまっているのかなと思いつつ、それともう一つは、10日前に国体の入場式に長女が生まれたばかりで、新潟に置いたまま離陸していってしまうという複雑な涙を流しながら離陸していたのですけれども、パイロットが、「何を“めそめそ”しているのだ、写真を撮りまくれ」、「分かりました」と言って、これに近づいていくわけです。うんと近づいてくれと言ったら、これまたパイロットに怒られました。「こんなところにうんと近づいたら、あおられて落ちこちってしまう」のだと言われましたけれども、できる範囲でということで、こういう写真が撮れているわけです。それで、新潟の上空にきました。私が目の前で見たビルが沈むという現象、いろいろな阿鼻叫喚の部分を見てきて、真ん中に来たときにビルがしゃんとしている。これは大丈夫だなと直観しました。

次に何があれだったかと言うと、実はここ、昔はこの辺に佐渡汽船がありました。このところから火災が発生しているのです。ここから出たということは、この辺で昭和石油が燃えていることは分かっています。西新潟側から火が出ると、これは全部燃えてしまうなど、これはえらいことだと思って、ここは正確に撮ろうと、後から大変貴重な映像になるだろうと考えまして、ここを慎重に撮ったのです。ところが、何が幸いするかと言われると、新潟地震の時の液状化が大変な被害をもたらしたわけですが、実はこの鉄工所なのですが、この周辺、液状化の水で全部覆われたわけです。この火災はこれ以上広がらなかった。消防車も、もちろん来ることはできません。すごい勢いで燃えているのです

が、全部水に囲まれたということです。

また上流の方に来るのですが、昭和橋が落ちて、ここが新潟駅です。ここに煙が出ていますのは、成沢石油です。こっちに昭和石油、ここには写っていません。ですから、この下町は全部ないしはこれが全部燃えるだろうというのはある程度覚悟しましたけれども、さっきのとおり水で助かった。どうしてもここにすごい現象が起きているわけですから、ここを中心に映像を撮ろうと思って、あらゆる角度から撮っています。これが体育館、これが数日前まで国体をやっていた競技場、ここが今県民会館になっています。ここは今、「リゅーとぴあ」ができています、その辺りの一帯です。

新潟地震でもう一つ、うんと特徴的だった、県営アパートが倒れたという時点はここなのですが、実は私の目はここに集中してしまっていて、よく見ると、ここに映像として映っているのですが、そのことには気がつかずに、今でもあの時、あれが撮れていれば全てを撮ったのにな、と残念でしょうがないのですけれども、ここがBSNで、北陸ガスのガスタンクがあって、その前ですからここなのですが、それはここに惑わされて撮ることができませんでした。

実はこの時に、この上にももちろん車がいたのでしょうけれども、落ちる車はなかったと、どうも後からいろいろな専門家の話を聞くと、揺れで落ちたのではなく液状化ないしは液状化による地盤の動きだろうと。と言いますと、先ほど私が空港で体験した、揺れているときには何も起きずに、2分後くらいに液状化が起きたということを見ると、ここに乗っていた車は通過できたのではなかろうかと、そのために落ちなかったのではなかろうかと思えます。この下で働いていた福田組の関係の方で、水道工事をしていた方がいたそうですけれども、その人も脱出できたそうです。ですから、揺れてから落ちるまでの時間はかなりあったのだらうと思えます。

このあたりを詳しく寄ってきております。

これが今の白山小学校です。この辺りが液状化で一番激しく、陸上側から川の中心に向かって約5メートルくらい動いたのではなかろうかということだそうです。液状化はただ沈下するだけではなく、横に動くのだということが大変な問題になっているそうです。もし東京でその現象が起きたら、下町はえらいことになるだらうと言われ始めているそうです。もちろんこのところに道路があったはずが、跡形もないです。それから、動いた証拠に、プールがあるのですが、これも少しこっちにずれたような形になっています。この部分が一番激しく動いたであろうと言われていています。ですから、一番激しく動いた部分に昭和橋があったのかなと思われても仕方がないです。プールが完全に二つに分かれています。おそらくこの水の中でも液状化が起きたのであろうという推定はあるそうです。この写真からは、液状化が終わって15分くらいたっていますので、その現象は写っておりません。

この時点で、ここに人がいます。ここにも人がいます。おそらく地震後、何十分後に津波がくるであろうと想定されて、おそらくこういうところに逃げられた方がいたのではないかと思います。

それから、競技場です。ここはきれいなフィールドが広がっていたはずですが、見る影もなくむちゃくちゃになっています。ゆっくりお見せできればいいのですけれども、今日はこの話はあまりメインではないので、映像だけ、できるだけ多く、早送りしてお見せし



ますけれども、この辺も液状化の水がジャンジャン流れ出しているというところですよ。

これは今の県民会館があったところですよ。県民会館というのは、新潟地震の時に全国から寄せられた義援金を基に建てられたと言ってもいい、正式の名前は県民会館ですが、震災復興記念会館という名称も確かについているはずですよ。ここの何か不思議な穴があるのですが、ここも何でそういう穴ができたかというのはちょっと分かりません。相当深く液状化が起きて、何か地盤の変化があったのでしょうか。

次の写真、この煙は白くなっています。ということは、鎮火したと言ってもいいはずですよ。この写真がニューヨークタイムズ1面トップと、それからロンドンタイムズだとか各世界の新聞がトップで扱ってくれたという写真ですよ。当時として橋が落ちている、向こうでコンビナートが燃えている、民家が燃えているという不思議な写真だったのではなからうかと。後ほどどの新聞社の写真を見ても、こういう映像を撮っていました。でも、これは上がっているのは私の写真しかないはずですよ。

これは万代橋の上ですよ。まだ津波はきておりませんが、既にこの辺にはこういう材木が流れていました。昔はこの辺にバラックがいっぱい不法建築であったのですが、その残骸でもないと思うのですが、どこから流れてきたのか、既にこういうふうな材木がいっぱいありました。人が右往左往しているのが飛行機の上から見えました。

これは、こっちが新潟駅ですよ。流作場五叉路ですか、この辺が今のダイエー（H17.11 時点）になっています。ここはみんな水で、水のないところ、ないところを人が歩いている。ここには動きが取れないバスがいっぱいたまっていると。みんな水のないところを渡っているわけですよ。

これは新潟駅ですよ。これは液状化した水ですよ。

次にここは明石通ですか、清水商店さんというのが相当激しく横に向いてしまった。でも、これをよく見ると、私は相当超低空で飛んでいるのですが、飛行機を見ている人は一人もいません。みんな黙々と歩いていました。もちろんそうでなければ、足下が危ないわけですから、空を見る暇はなかったらと思うんですよ。

これは駅から東側を見ているところですよ。ここに東跨線橋が落ちています。この辺は液状化した水の跡ですよ。

これも、もっとクローズアップが出てきます。

これを見ていただくと、ここに1台バイクがある。でも、この人は怪我をされたのかどうかは分かりません。上からですから。線路もこんなふうの一つ分くらい横に動いています。

これは何かと言いますと、白新中学校だと思えます。周りは水ですよ。生徒さんたちは水のないところに避難しています。ここは白新線ですよ。白山駅はこの辺ですよ。この線路もすごく影響を受けているということですよ。

これは今、がんセンターのあるところ、白新中学校があるところの十字路ですよ。これも水に覆われて動きが取れないで、こういうふうの人が固まっているという状況ですよ。

コンビナートに戻ってきています。こういう写真で、こういうふうにはポンと広く見せられると分からないのですが、ここのところがクローズアップされています。液状化で全部こういうふうにはタンクが浮いてしまっているわけですよ。ですから、この中に毒物が入っていたりしたら、相当危険な状態だったのだらうなという気がします。

今、ここに沈埋トンネルの新しい線が通っています。これは火力発電所、その備蓄のオイルですよ。けれども、こういうところ、全部漏れています。

最後に、もう一回この空港を撮るわけですが、これが昭和石油、これが成沢石油、滑走路はこんなふうにはび割れています。空港ビルも完全に1階分沈んでしまって、液状化した水と自分自身

が沈下したというのと合わせて、これだけ沈んでしまったわけです。実はここに2台車があります。こっち側の黒いのが私の車です。何でもありませんでした。被害は受けませんでした。何週間か後にそこに取りに行きました。運がいいというのは、そういうことかなと思えるほど、奇跡に近いほど、こっちはこんなに沈んでいるのに、ここだけは助かっていたという。

この煙、これはちょっとオカルトめいて見えますが、この辺に鬼の面が見えないでしょうか。これは私がたまたま見つけ出して、こんなこともあるのかなということです。実はここの成沢石油がどういうふうに燃えたかというのは、次の映像になります。

このところですが、1か所だけではなしに、2か所ぐらいから火が出ている。それをある角度から見ると1か所ぐらいしか見えないのですけれども、そうとう何箇所からか出火してしまったということだと思います。その時に、一番最後に見たのがこれで、ここが松浜橋の古い橋です。これが今の松浜橋です。建築中でした。しかし、落ちてしまいました。古い橋をその当時は使っていたので、ここに2台の車が取り残されました。これが1台、もう1台はタクシーです。さっきのは標識がありませんから2台です。実は、この時に大変な状況の中で、この船がこの人たちを助けに来るのです。私はこの状況を飛行機から見た時、新潟の人はすごいぞと、こんな時にでも人を思いやられる気持ちを持っている人がいるのだというのを見て、涙が出ました。それぐらい感動した映像です。

一番最後に新潟を離れる時に、今の新潟バイパス、高速道路の上あたりから新潟を振り返って、カラー写真を撮っています。

これは新潟地震が終わってから、6月30日になってから、アサヒカメラというカメラに頼まれて、是非、その状況を撮ってほしいということで、昭和石油の燃えた跡を何枚か撮って、この2枚が採用されて本に載ったものを今お見せしています。

先ほど言ったこの映像を撮ったのは、この大きいカメラと、動く映像はこれで撮っているということです。地震に関しては、これでは終わらせていただきます。

(阿 達)：世界のスクープ、大衝撃写真といいますが、皆様、初めてご覧になった方も多いかと思えますけれども、信濃川を語るにはすごい写真から始まって、これからまた“がらっ”と変わったようなきれいな風景が続きますけれども、これは先生が27歳の時に撮られた写真、偶然、たまたまにしても巡り合わせといいますが、カメラマンになるべくしてなったということなのかなと私は思っていますけれども、阿賀野川の一部写真がありましたが、信濃川のものすごい写真から入らせていただきました。

これは先生、昭和39年、27歳の時に先生はこの衝撃的な新潟地震に出くわしたということは、これからのカメラマンとしての先生に大きく影響していると。

(弓納持)：ある面では、私はそれを機に東京に出ただろうと思われた方もいたのしょうけれども、私はやはりそれは偶然に撮れた映像なのだから、やはり新潟の地に足をつけて仕事をしていこうと思ひまして、新潟に止まりました。

(阿 達)：それまで報道写真も撮っておられたわけですがけれども、商業写真的なものから報道写真に大きく旋回していく原点になりますか。

(弓納持)：はい。

(阿 達)：なるほど。では、これから本題に入ります。今までのすごい惨状から一転してきれいなものになりますけれども、また先生の解説で楽しんでください。

(弓納持)：信濃川は、実は皆さん今日、夕方ご飯を食べられた、ないしは朝、顔を洗われた、これからお風呂に入る、その水は信濃川の水であると思われた方はあまりいないのではないかなと、私は極端に言えば、自分の身体の中に流れる血の一滴までも信濃川の水であると思っております。その川を今までずっと

見ている、私の以前に日本一の川である信濃川を写真集に収めていらっしゃる方がいなかったの、これは私のためにとってあった題材なんだなと思って、信濃川を撮ろうと。でも、信濃川を見た時に、映像にすごくしにくいのです。でも、自分が今まで地震後、それからずっと何年か積み重ねてきた自分の技術をもってすれば、何とか新潟の母なる川の信濃川を撮ることができるだろうと思って、あらゆる角度からいろいろな場所を探してみました。信濃川ですから、千曲川は撮らないでもいいと、信濃川だけを撮ろうと。

最初にまずお見せしている川、信濃川は黄金の川であるぞと。これも飛行機をチャーターしまして、新潟を夜明け前に特別許可を取って、小千谷のあたりで撮っている映像です。たまたま光の加減で自分の思っている黄金の川に写ったなと思います。

これは長岡のあたりです。やはり黄金でした。

信濃川で一番有名なのは、上流の方へ行くと河岸段丘です。ここが津南町です。ですから、こっちは長野になります。もちろんこの川がこれを造ったのでしようけれども、この河岸段丘の間を流れているというのが非常によく分かりやすい映像ではないかと。最初のうち、地上からではなしに空から全体をお見せするために、こういう映像にしております。小千谷市の方から十日町の方を望んで見ております。



(阿 達) : 信濃川の写真集、100枚近く写真がありますけれども、冬に撮った写真が結構多うございますよね、それは何か。

(弓納持) : 私、先ほど信濃川を撮るのは難しいと言ったのですけれども、確かに難しいのですが、季節、時間をうまく利用すれば、撮りやすい映像なのです。撮影を始めるときに、秋から始めることにしています。秋、晩秋でいろいろ気象条件が変わっていく、初雪がある、雪が積もる、そこに展開する風景が、普段見慣れてはいても、雪というオブラートである程度包まれて、ここが今、十日町の方から流れてきた川と魚野川が合流して、下の方へ流れていく。この山は米山です。地震で言いますと、今回、この辺が一番大変だったはず。その信濃川がずっと新潟平野に入ります。地図の上でよく見れば、信濃川がこういうふうに蛇行しているのは分かるのですけれども、そんなふうに地図を見ることはまずなくて、こういう映像で見せられると、これはアマゾンではないかと、アマゾンには雪が降らないでしょうけれども、それほどS字型に曲がっているわけです。後ほど皆さん覚えておいてほしいのですが、こういうふうにS字型に曲がっている、こういうところからいろいろな角度で見ると、この左側の方には弥彦山があるのです。その辺をこのS字型を頭に入れておいていただくと、非常に分かりやすい映像になるかなと。こっちは新潟になります。この辺が中ノ口川になります。これをもうちょっとアップで撮っています。



(阿 達) : 加茂と白根の間ですね。

(弓納持) : そうですね。このあたり、梨の花、桃の花、大変きれいですよね。その映像も後ほど出てきます。中ノ口川はここに流れています。

(阿 達) : 先ほどの山本山周辺のS字もきれいです、これもきれいなS字ということで興味を持たれているのですか。

(弓納持) : 私自身の中にも、信濃川はこんなに曲がって見えるというのは、初めてでしたので。

- (阿 達) : わりと直線的に流れていると思いますかね、でも、S字型で大きく蛇行するところもあるのだよという。
- (弓納持) : そうですね、自然は直線ではないという、まさにその言葉どおりかなと。その信濃川に訪れる冬の風景。
- この映像なのですが、越後川口あたりで撮っているのですけれども、この日はマイナス 10 度くらいまで下がりました。マイナス 10 度くらいまで下がりますと、川から蒸気が立つわけです。よく朝のニュースで、北海道で川霧が凍って、ダイヤモンドダストになったよというニュースがありますが、マイナス 10 度くらいになると、新潟でも全部ダイヤモンドダストになった映像です。
- これはちょうど県境のあたりで、こっちの方が長野、こっちが新潟というあたりで大雪が降ったので、わざわざ撮りに行っているのですけれども。
- (阿 達) : これは空撮なのですか。
- (弓納持) : 橋の上から撮ったものです。この線はスクリーンの線なので、それを頭の中で削除して見ていただきたいと思います。
- 信濃川には渡し船が2か所あるのです。今はもうここはなくなりましたが、マサラの渡しという。この辺に橋ができましたので、この渡し船は必要がなくなったのですけれども、昔はこういうふうな情緒があったと、情緒と言っているのかどうか分かりませんが。
- (阿 達) : 生活の面もありましたでしょうし、農作業もあったでしょうけれども、今はもう牛ヶ島（川口町）くらいでしょうか。
- (弓納持) : 後ほどまたその映像も出てきます。私、先ほど紹介の中で、上越の生まれ、吉川町の生まれです。一晩に1メートルくらい積もることは平気です。ですから、雪の中での生活というのは嫌というほど、屋根の雪下ろしから雪踏みからすべてやらされたので、雪は苦しいというのは、生活の中でいやというほど味わってきています。でも、ニュースだとか新聞社でなら、そういう映像は必要だろうけれども、私はそれは必要ないと、雪は美しいよという撮り方をしたかった。
- (阿 達) : 墨絵のようですね。
- (弓納持) : これは与板橋から長岡の方を見ている。それから、これは三条の景雲橋から下の方を見えています。これは景雲橋です。今は違う橋になっております。実はこの橋の部材は、先ほど新潟地震の時に落ちた昭和橋の部材を持って行って造ったのだと言われています。そう言われてみると、そうかなと、何か面影があるのかなという気がしますけれども。
- (阿 達) : これは木造の時の橋ですよ。
- (弓納持) : そうです。橋と言えば、やはり長生橋も美しい橋の一つでしょうから、こういう見方もあるよという。
- さて、これはどこでしょうというクイズを出してもいいぐらい、県庁です。私はこの近くに住んでいますので、いい風景はすぐ足下にあるよと。
- (阿 達) : 灯台下暗しですね。
- (弓納持) : 何も遠くへ行かなくても、いい風景、気象条件さえ合えば、ないしは平生の行いがよければ、こういう風景に会う確率は高いよと。
- これは、県庁の上から陽が出ている。これは、県庁に陽が当たっている。
- ここだけ見せられると、何かヨーロッパか何かの風景に見えなくもない。
- (阿 達) : 県庁もこう見ると、様々ないい風景になりますね。単調で何だという感じがしますがけれども、素敵ですね。
- (弓納持) : でも、なかなかこういうところに、こういううるさいものが写らなくなるような霧が出るというのは、年に5回くらいしかないのです、その辺は気を付けて見ていないと。

これは、誰しも風景を撮っていると、お月さんを写したいなと、万代橋とお月さん。これは方向から見ると、お月さんを撮るのは皆さんだいたい夕方と思われるでしょうけれども、実はこれは朝、撮っているのです。佐渡の方へ沈んでいこうとするお月さんを撮っている。実は、この写真を撮った時に、この後に本当にびっくりするぐらい、こういう霧が出てきたのです。これは1月頃の風景ですけども、びっくりしました。こんなきれいな万代橋は見たことがないというくらい。

(阿 達)：これはかなり気象の予報的なものも調べられて、当然行かれるわけですか。

(弓納持)：偶然。風景写真というのは、偶然の出会いが80パーセント以上あると。でも、なぜそういうふうに偶然にいっぱい会えるかと言うと、回数を通っているからということと言えるかと思います。

(阿 達)：現場100回ですか。

(弓納持)：また、上流の方にちょっと行きます。魚野川がぶつかっているところから越後三山を見ている風景です。この季節、春になると、去年は相当降ったからこういう状況があったと思うのですが、川岸に積もった雪が春の流れとともに、“がさっ”とって落ちる瞬間、そういうものを見たときに、春が近いぞというのが写せればと思って撮った作品です。

これは、まだ雪がある川の淵に芽生えが始まっているという状況です。

これもクイズにしたい、さて、どこでしょう、京都でしょうかということなのですが、昭和橋です。今、この擬宝珠は黒くなっていますから、こういう色ではないのですが、こうやってみると、京都と言われても間違いじゃないくらいです。その上から見た花の写真です。季節がだんだん春に変わっていています。

これも私の経験では、信濃川の新潟市のあたりに桜が咲いているときに、かなり霧がかかる確率が高いのです。今までの経験だと、3年に1回か5年に1回は、そういう状況を見ることはできます。

これも万代橋の上なのですが、中国ではないかと言われるぐらい、この自転車が悪いのではないかと思うのですが、ここにチューリップが植わっています。ですから、その時期です。

これは同じ日に撮っています。こういうふうに万代橋を見ると、本当にヨーロッパのどこかの大会の、テムズ川か何かにかかっている風景と言っても間違いがないくらい、こういう風景に出会った時、本当にうれしいです。



(阿 達)：得したという感じですか。

(弓納持)：私だけ、こんないい風景を見ていいのかしらと思うほど。

これはホテルオークラの上から見たもので、今はここは少し違ってはいますが。

それで、先ほどS字型のところから弥彦山を望むと、こういうふうに見えますよと、春先と秋にちょうど弥彦山の真上に夕日が落ちていきます。望遠で見ると、こういうふうに見えます。まるで弥彦山から川が流れ出しているのではないかと思えるほどです。ですから、よく注意して見れば、こういう景観、こういう情景というのは、これだけ長い川ですから、いくらでもあるわけです。

同じ時期ですけども、桃の花が咲き始めています。

先ほど桃の花は誰でも知っていますし、梨の花も遠くから見るときれいなのですが、こうやってうんと間近に見せられると、梨の花もきれいだぞと言えるのではないのでしょうか。ですから、桜の花見だけではなく、梨の花も花見をしてほしいなと。しかし、この時期、この下で受粉するために働いている人もいますから、あまり脇で酒を飲んでいるわけにはいきませんでしょうけれども、で

も、やはりこういう素晴らしい景観が信濃川の川沿いにうんと展開しているというのは。

(阿 達)：長野県側の飯山付近もかなり花畑が広がっていますけれども、新潟の河川敷もずっと花畑ですね。

(弓納持)：こういう目で見れば、本当にすばらしいと思います。

これは、桃や梨ではなしにニセアカシア、十日町に近づきますと、越後川口とか小千谷とかというところになると、川岸にはこういう花が咲いています。

これは弥彦山の上から見た田植え直後、ないしは直前の風景です。先ほど今日、朝、皆さん顔を洗った水が、信濃川の水であるというふうなことをちらっと言いましたけれども、実はこの田んぼ、この新潟平野、これほど広い平野を潤している水も信濃川の水である。これほど隅々まで水を行き渡らせるという技術、これは漠然と見ていけば、そんなことは気がつかないのですけれども、私もたまたま農業関係の仕事もさせられることがあるので、すごいことではなからうかと思うのです。

(阿 達)：簡単に灌漑排水と言いますけれどもね。

(弓納持)：だんだん季節は梅雨時になっていきます。梅雨時というのは、新潟の上空にちょうど前線が停滞しますと、その前線の上の雲がポンと外れると、そこは雲がないのです。そういう日の日の出前、それから夕方は、新潟の上空にある前線の太陽が当たって、すごい色になる。これは早起きは三文の得と言える風景ではなからうかと。千歳大橋の上から見ている風景です。今でこそ、なかなかこういう川船は見られませんが。

(阿 達)：私、今日、見ましたよ。砂利と砂を積んでいる船が走っていました。

(弓納持)：今は砂利とあれだけですよね。さっきの新潟地震の時に、あの昭和橋の下を4、5隻の船が通っていましたが、それを考えると、今はこういうふうには3隻も4隻もという情景は、なかなか見ることはできないですね。

先ほどもう1か所、渡し船がありますよと言ったのは、牛ヶ島ですか、今回の地震の中心地と言ってもいい辺り、これは対岸に農地があって、こちらの方がこの船で通っている。ですから、こういうふうな農作業の格好をした人たちが船で渡るといって見られるわけですね。

穏やかな信濃川ではあるけれども、特に梅雨時には少々荒々しいこともありますよ。

(阿 達)：これもまた信濃川ですね。

(弓納持)：そうですね。夏を迎えます。虹が出ている情景はよく皆さんも見るのでしょうけれども、写真に撮りたいなと思っても、だいたいいい虹が出たとき、カメラを持っていないことが多いのです。たまたまこれはいい情景に出会えたので撮れたのですけれども。それから、夏の雲、新潟の夏というのは、なかなか湿気が多くて、こういうふうにはクリアに空がきれいになることはないのです。フェーン現象や何か起きれば、こういう情景なのです。ですから、フェーン現象が起きるといって分かれば、カメラを持って川岸に出てほしい。そうすれば、こういう入道雲を撮られる確率は高いですよ。

これは入道雲が夕日を受けて、風で入道雲が崩れたのに夕日が当たっているという、大野大橋の上から上流の方を見ている映像です。今はこの照明がなくなっていますが、私は風景というのは、こういう美しさで追っていても、ひょっとして時間がたつと、貴重な映像に変わりうるのだと。ですから、撮っている時は単なる風景写真かもしれませんが、時間という経過によって、相当貴重な映像として蘇ることがありますよということを皆さんに言っておきたいです。

次に、信濃川と言えば、長岡の花火もありますけれども、それにはちょっとかなわないにしても、新潟の花火、それも、今はこれもここではもう上がらなくなったわけですから、昔、こんなところで花火が上がっていたのだよということが言える風景かと思います。

実は、これも意外と皆さん気が付いていない。先ほどの市の局長さんの話の中で、新潟は港だと。でも、考えてみてください。新潟の港、信濃川を見ていて、水位が上下するということを感じたこと

があるでしょうか。太平洋側の川ならば、大変な話です。水位が潮の干満によってうんと変わるわけです。信濃川はそれがほとんどゼロに近い。ですから、こんな大きな船。

(阿 達) : 最初、地震の写真の中で、川の水がかなり逆流しているような写真がありましたけれども、普段はないわけですからね。

(弓納持) : そうですね。こんな大きな、これは26,000トンあるそうです。これに乗ってウラジオストクに行ったのですけれども、その時に撮った写真なのですから、こういうふうに大きな船が常時入って来れるという港、しかも信濃川を遡って、ここまで来れるという。何でもないのであるけれども、大変な宝物を私たちは信濃川から与えてもらっているのではないかという気がします。

(阿 達) : かなり砂を運んでくるでしょうけれどもね、浚渫が大変でしょうけれども。

(弓納持) : 浚渫は大変でしょうけれどもね。

(阿 達) : 新しい風景ですね。

(弓納持) : 新しいこういうふうな風景。でも、万代橋や今の新しい橋だけではなく、八千代橋も見方によっては非常にいい風景です。新潟地震の時は、これは影響を受けていないのです。昭和橋が落ちた、万代橋の上下はちょっとおかしくなった。でも、この橋はほとんど影響なしで、すぐ供用されたはず。その橋もなかなかいい情景を展開しているのではなかろうかと。

季節は秋に変わっています。これが先ほど最初に出ていた映像です。新潟県で写真を撮りにどこへ行ったらいいですかと言われる時に、今、ちょっと行きにくくなっていますけれども、山本山の上へ行かれたらどうですかと、その下には信濃川が流れていますよと、越後三山が真正面に見えますよという情景が展開しているわけです。ですから、今はちょっと地震で上がれないかもしれませんが、その前はだいたいこれからの季節、秋になるとカメラマンが大勢いたるところです。

(阿 達) : いわゆるお奨めの撮影スポットですか。

(弓納持) : 行って、まず間違いなく写真が撮れる。季節もちょうど今ごろです。これは牛ヶ島から越後川口の方を見ている、ちょうど今ごろの映像です。

これが先ほどS字型になっている、弥彦山の上に夕日が沈むところの今ごろのシーズンの秋の夕暮れの写真です。

これはまた逆に、やや同じ近くで、朝の光を撮っている写真です。だんだん秋が深まっていきます。

これはちょっとどういう写真なのだと、万代橋にだけ光が当たっていると。これも今ごろの時期、今にも雨が降りそうな真っ黒な雲、その間から一条の光が万代橋に当たった瞬間を、たまたまそこにいたので撮れたという作品です。ですから、もう5分早くここに行っていれば、こっちに虹が出ていたのです。それは撮れませんでした。その辺、やはり平生の行いの悪さかもしれません。

現代の新しくできたビルの上から見た信濃川です。これも季節はちょうど今ごろです。

先ほど信濃川は黄金の川だと言いましたけれども、そういうまさに黄金の川であってほしいし、また、そうであるなと思います。

これは12月に入ってから映像なのですが、この夕日は大変きれいなのですが、実はこの映像を撮りに行った時には、これはどうでもいい作品なのです。

次に絶対こうなるという計算のもとに行った作品、次はこれです。これはたまたま計算できたのです。信濃川、県庁、弥彦・角田、すべて新潟の宝がこの中にありと、市役所がないのがちょっと残念ですが。

これも一昨年12月1日、私は12月1日生まれなので、天から私に恵んでくれた風景の一つだと思って撮ったのですが、実はこの時に太平洋側に台風があったのです。その台風の雲がちょうど新潟、佐渡の上までそり雲があって、その向こうは先ほどの梅雨時の空と同じで、向こう側に雲がないので

す。そこに落ちていった夕日が、この上空の台風の端の雲を照らしているという状況、これもテレビを見ていたら計算ができたので、カメラを持って12月1日、私に対する誕生日プレゼントだと思って、この映像を撮りました。ですから、私にとっては、やはり信濃川というのは大変な宝なのかもしれません。信濃川に関しては、このぐらいです。

(阿 達): とてもすばらしい写真の数々でした。本当に信濃川は時間や季節や、あるいは場所が変わると別人のように次々と描かれているし、姿が見られていると思います。これまでも何枚か写されていましたが、信濃川がもたらした恵み、今写っている「はさ木」もそういった面で昔、あちこちで見られたシーンなのでしょうけれども、これもだんだん少なくなってきました。それから、いわゆるコンバイン、乾燥機の普及等がありますけれども、あるいはアメシロに食われる被害、あるいは日陰がよくないということで、だんだん減ってきました。そういった意味で、先生もこの「はさ木」についてたくさん写真を撮り続けました。また、新潟の「はさ木」と言いますと、他の地域も稲を乾燥させるという意味では様々な方法があるのですけれども、農道の両脇にこういった形で木を植えて稲を干すというところは、北陸あるいは新潟に見られる独得のもの、稲作が普及して、それこそ9世紀当たりから京都から伝わった手法だと言われてはいますが、新潟独得の「はさ木」のシーン、カットをこれから照会したいと思います。

(弓納持): 今ほどの話の中に、こういう「はさ木」は新潟だけと思われているでしょうけれども、実は琵琶湖の周辺、京都だとか滋賀県にもこういう木を田んぼの脇に植えているところがあります。そこは景観として残しておこうという運動をして残しています。しかし、新潟のように、こういうふうは何本もあるという映像ではないのです。畦に1本か2本植えて、農作業のための日陰を作るという使い方をされているようです。ですから、この「はさ木」は新潟だけのものではないと。今、ここにお見せしているのは、岩室の辺りで撮ったものをお見せしていますが、この辺の木の種類は学名で言うと、トネリコです。普通、タモギだとかいろいろ言い方がありますがけれども、トネリコだそうです。後ほど山手の「はさ木」、ハンノキを使ったもの、それからごく特殊にポプラの木を使った「はさ木」も後ほど出てきます。新潟の風景、新潟平野の風景、本当はこれを残してあれば、今どこの平野でも同じような景観になっていますけれども、ランドマークとしてこんな素晴らしいもの、しかも生活の用をなしてきた素晴らしい文化であるものが、効率を優先させるがために切ってしまったと。今にして思えば、やはり残念かなという気がします。

(阿 達): いったん切ってしまったものは、なかなか植えるのに時間がかかりますものね。

(弓納持): そうですね。こうやって1枚1枚見てみると、まさに情景、情緒そのものではないかという風景ですよ。この写真展を新潟でやったり、東京でやったりする時に、皆さんこの映像に自分の生活の体験を重ねてくれるのです。私は風景写真の一番輝く瞬間というのは、見る人がその写真に自分の思いを重ねてくれる、見る人がその絵に自分の思いを重ねてくれた時に、この映像が最高に輝く瞬間だというのが私の風景論です。

(阿 達): 私の場合ですと、はさがけで、小さい頃、下から上にいる親たちに稲をあげたり、あるいは稲が終われば、そこでもくるくる鉄棒のように回ったり、学校から帰ってくる時、稲藁のにおいを嗅ぎながら通学したという記憶があります。

(弓納持): そういうふうに、そういう思いをふっと引き出してくれる映像が、私は最高の映像ではないかと思っているのです。

次に、先ほどポプラの木を使ったと言いましたが、これはポプラの木を利用した「はさ木」です。これも既にないですが、この辺が信濃川ですから、この辺りはややハンノキになっているのか、トネリコなのか、この木については分かりません。それから、昔、私が新潟に来た頃、45、6年前で

すけれども、阿賀野川の周辺だとか蒲原平野で、やはり水路があって、そこを刈った稲を船で積んで運んでいましたよね。そういう風景を私はどうしても撮りたいと思って、蒲原平野を探したら、ありませんでした。きれいに整備されて、直線になっていますから。これはたまたま私のふるさとの吉川町の近くの大潟町です。ですから、この後ろの山は米山です。

(阿 達) : これは最近の写真ですか。

(弓納持) : これは相当前の写真です。

(阿 達) : 今はどうなっていますか。

(弓納持) : 今はやはり直線になっています。残念ながら。

(阿 達) : 残念ですね。

(弓納持) : 先ほど山手の木はトネリコじゃない、ハンノキだよというのは、この木がそうです。この辺の枝ぶりがちょっと違ってきています。ここもうんと違ってきますよね。これは五泉の辺りに行くと、だいたいこういうふうになっています。これも既にないわけで、先ほど映像として美しさで追いかけても、それは時間がたてば、何かすごい記録になるよという。この木も巻町、今は新潟市ですけれども、桜林というところに40本あった木を2年ぐらい追いかけた写真の中から見えています。この木を持っていた高橋ヨシオさんという人なのですが、お前さんたちが写真を撮りにくるまで何とか守るよと言ったのですが、この近くに大通川という大きい排水路、それこそ世紀の大工事と言われるくらいの農業排水路ができたので、その残土でこの辺の基盤整備をやったりで、これも既になくなっていきます。

(阿 達) : 先生が「はさ木」に惹かれているものというのは、どこの辺にあるのでしょうか。

(弓納持) : 新潟の風景を撮る時に、新潟の風景は暗いというイメージを、暗さで表現されてきたものというのは多いと思うのです。代表的なもので言えば、濱谷 浩(はまや・ひろし)さんの裏日本だとか、そういう映像だとかで、一言で裏という意味で切り捨てられてきたような気がするのです。でも、それはそこに住んでいる者にとってみたら、ちょっと違うのじゃないのと、特に日本海という言葉をはかて使えば、いつも荒れているように思われていますけれども、とんでもない話でね。

(阿 達) : ちなみに先生が尊敬される林 忠彦(はやし・ただひこ)さん、これは驚くほどの感性と写真に対する執念の賜という評価をされていますけれども、一見、何の変哲もない木の羅列だけれども、芸術的な香りが満ちあふれているということを述べていらっしゃいますよね。

(弓納持) : 私、新潟を表現する時に、先ほどの信濃川もありますけれども、この「はさ木」を通して新潟の平野に展開する美しさ、それが撮れるのではなかろうかと。やはり行って見ると、風景はほほえんでくれるというか。だから、今、写真を撮り始めた方は、こういう風景を撮りたいだろうなと思って、なかなか難しくなっています。

(阿 達) : 今は一部天然記念物風に残っているだけですものね。

(弓納持) : そうですね。よく考えてみると、先ほどあの山の上からこの平野を見たときに、一面の水をコントロールして、それが信濃川の水である。信濃川の水は黄金の水である。まさしく黄金の平野を作り出してくれているわけです。

(阿 達) : 黄金の実りですね、潤しているということですね。

(弓納持) : ですから、私はこの「はさ木」の本には、秋に刈り取った黄金を身にまとった「はさ木」という風に表現したこともあるのですが、



(阿 達) : 黄金のカーテンとかね。

(弓納持) : これはポプラを上手にうまく利用したという例です。ダイナミックですよ。今ごろの季節、本当にこの「はさ木」があったら、新潟平野の朝、素晴らしい情景が展開しているのです。こんな風景、自分一人で楽しんでいいのかしらと思いつつながら写真を撮っていました。でも、ひょっとして、自分一人で楽しんでいても、皆さんにこうやって見てもらえるという幸せもあるのかなど。

(阿 達) : 共有できる楽しみ。

(弓納持) : 今、これは何ですかと聞かれるかも、モンゴルのパオですかと言われそうな気がしますけれども、ワラニオですよ、これもなくなりましたものね。



これはポプラの木です。これも実はこの下に岩室温泉があって、ビルや何かが見えるのですけれども、たまたまこういう地をはうような霧がかかっています、撮って残してくれやと言ったのではないかと思います。ほど美しい風景だったので、感動しながら撮りましたけれどもね。「はさ木」に関しては、このくらいです。

(阿 達) : 今、ニセアカシアとかポプラの話がありましたけれども、北海道と新潟の共通点という、思い浮かぶでしょうか。先ほど先生とお話ししたら、豪農があるのが北海道と新潟、圧倒的に面積が広い北海道はともかく、ある意味では新潟が豪農の中心地と言いますか、あるところではないかという話をされました。写真集からすると、豪農の館が1985年で一番早いのです。後の作品のモチーフになったのではないと思われる豪農の館のシリーズを拝見しましょう。

(弓納持) : 今ほど北海道は広いので、豪農がいっぱいあるだろうと、確かに多いです。50町歩を基準に考えますと、新潟が170、北海道が366あります。それから、100から200町歩を考えると、新潟が54で、北海道が182、ずっと行きますと、一番多くなって1,000町歩で新潟が5、北海道は10あります。新潟は全部で500町歩から1,000町歩以上を考えると264、北海道は659、さすがに北海道。でも、本州はどうかと言いますと、山形に50町歩以上が75、100町歩から200町歩で36、200から300で8、300から500で3、500から700で1、それから1,000町歩以上が、本間さんがあるので1で124です。ちょうど新潟の半分くらいです。じゃあ、信濃川の上流の長野はどうかと言うと、50町歩が24、100町歩から200町歩の間で6しかありません。

(阿 達) : これも、ひいては信濃川の恵みからきている館ですから、これこそ古い建物として残しておきたいというのもの、いくつかあろうかと思えます。貴重な豪農の館ですので。これは随分横に長いですね。

(弓納持) : これは、川西町の星名さんというお宅です。ここは約150町歩ぐらいもっていらした。雪が多いので、これは2階建てに見えますが、実は1階建てです。実はこの中が次の映像で、こういうふう雁木になっています。びっくりしました。中はこういうケヤキで、漆を塗ってという大変重厚なお宅です。雪が降って、これは本当に2階建てに見えるのですけれども、2階建てではありません。お宅の後ろにはこういう茶室もあるし、さすが、こういうケヤキがあるというのもすごいですね。

(阿 達) : 豪農ならではのですね。

(弓納持) : 次に、これは長岡なのです。長岡の吉野川は酒屋さんの前に、キナサフランという薬用酒を造っていらっしゃる吉沢仁太郎(よしざわ・にたろう)さんというお宅があるのですが、ここのお宅もすごい豪農なのです。こういう立派な、新潟ではちょっと見ることができない蔵を残しております。

これがあまり知られていないのですけれども、中之口村、今は新潟市になりましたけれども、ここに山田金次郎(やまだ・きんじろう)邸というのがあります。実はこの代を相当遡りますと、9代

目の方は新潟新聞の社長だったそうです。460町歩ほど持っていらした。

次に、こういう豪農は、お宅の中に茶室を必ず持っていらっしゃると言ってもいいのではないかと思います。

次に、これもあまり知られていないと思うのですが、吉田町の今井さんというお宅です。背景は弥彦山です。ここのお宅は、私の実家の吉川町辺りまで土地を持っていました。今の吉田病院だとか、それからこの地域で銀行もなされているわけです。青海からこちらにおいでになって、財をなしていかれたと。このお宅、こっちが銀行で、こっちはいろいろ薬や何かもやっていたのでこういう建物があるのですが、ここをポンと入りますと、こういう情景です。びっくりしました。これは撮影のために出したのではなくて、ちゃんと季節季節に変えているのですよと言われました。ここをまっすぐ行きますと、各米倉に道があるのです。この後ろに川があって、そこからこの米倉に米を運んだというような状況です。



次に、笹川邸です。これも普段見ている時にはこれしか見ません。上空から見ますと、後ろの方にも米倉があります。こういうふうに通並みのように米倉があります。

次に、これは和島の木村邸です。なぜこれが出てくるかというと、良寛さんが亡くなられたところです。ここも豪農だから、良寛さんを保護できた。私は思うに、新潟というのは良寛さんだとかござさんとかあるわけです。そういう人たちを育てていけただけの財力を持っていたと思ってもいいのではないかと。



次に、これも新潟市赤塚の中原さんのお宅です。このお宅は内野新川ができた後で可能となった広通郷の干拓開発を成功させて、藤倉新田という、上から見ると丸く見える土地があるのだそうですけれども、それを開田させてこういうふうな財をなしたと。明治天皇が北陸ご巡幸の際には、ここで昼食をとられたと。なかなか立派なお宅です。

これは、新潟市黒鳥にある鷲尾邸です。これもごく最近までこのご当主は、土地改良区をやられていまして、これも中之口の築堤に尽力された方です。

これは、ご存じ北方文化博物館、これは言うに及ばずなのであまり語りません。

最後に市島邸が出てきます。市島邸は何年か前の地震で大変壊れてしまった部分があったのですが、ここのお宅は北方文化博物館より余計で、最大2,000町歩で、2,000町歩というと、さっき話にちょっと出た酒田の本間様と肩を並べたと言われるぐらいの財をなしたお宅です。この建物が完全になくなってしまったと、惜しいですね。



ですから、先ほど言ったとおり、写真というのはこうやって時間がたつと、大変貴重なものになってしまうということです。そのお宅の座敷から見た風景です。以上です。

(阿 達) : 本当に駆け足で申し訳ございませんでした。先ほど和島の木村邸、良寛様の関係の写真も先生の中にいっぱいあるのですが、今日は信濃川ゆかり、信濃川からの恵みを中心に送っていますので、

「はさ木」と今の豪農の館で止めさせていただきたいと思います。

今ご覧になったように、すばらしい信濃川の風景、あるいは逆に言うと、むごたらしい新潟地震の信濃川を含めた惨状、きれいな風景と醜い風景と言いますか、それを含めて私たちはいいものも悪いものも、ある面では未来に残す役割があるのかなと思っています。世の中には、人間を含めて時代の移り変わりの中で変わらないでほしいと、あるいは変わってほしいというところがあると思います。私ども報道に携わる者も含めて後世に伝えなければならない貴重なもの、そういった意味では、これからもどんどん伝えていきたいと思っています。先生に言わせると、そういった伝えるべく責任と、我々自負を感じている私どもを含めたポジション、セクションなのでしょうけれども、だんだん少なくなっていくねということで、若干嘆かれておられたようです。

今ほどご覧になった信濃川の「はさ木」、それから豪農の館など、県内には新潟ならではのものがいっぱいあります。ひょっとしたら、世界遺産に匹敵するほどのものかもしれません。しかし、壊されようとするもの、このままではなくなるのではなからうかというものも多く、今のフィルムで見られたと思います。中でも今日のテーマだった信濃川は、今後ますます滔々として流れ、悠久であってほしいと、信濃川から様々な恵みをもたらされている自然も生業も、そして、住民も未来永劫であってほしいと私は思います。弓納持さんにも、幼い頃からのカメラマンを志願されて、27歳で先ほどの新潟地震に遭遇されたと、それをきっかけにして今までたくさんの写真を撮られてきております。特に50歳前後では信濃川の「はさ木」、豪農の館などの写真集の3本作といますか、新潟の財産を撮られています。私は冒頭にお話ししましたが、今69歳、いわゆる古希を迎えています。人生100年の時代からすれば、まだまだ先生は信濃川と言うと、ちょうど中流付近の先生が大好きなS字カーブを描いている、蛇行されている川口付近、山本山周辺の信濃川辺りに差し掛かっているのではないかなという気がします。先生、今日はどうもありがとうございました。

(弓納持)：ありがとうございました。

(阿 達)：さらに、信濃川の流れに負けないように、これからも更なる映像への情熱を、それから執念を燃やしていただければ、私も今日を持った甲斐があったと思っています。

(弓納持)：まさに、黄金の川・信濃川、万歳ですね。

(阿 達)：それでは、先生の映像による今日の第2回の講座を一区切りつけます。これから私ども2人、ステージの方に上がらせてもらいます。質問等がありましたら、受けさせてもらいますので、よろしくお願いいたします。

今日は、本当にこんなにたくさんの方においでいただきまして、ありがとうございました。せっかくのチャンスですので、先生に何なりと、私が言うのもおかしいですけども、質問等があれば受けさせていただきます。

(会 場)：先生、どうもありがとうございました。非常にきれいな、そして地震のショッキングな写真、本当に勉強になりましたし、風景も本当に楽しませていただきました。ありがとうございました。

ついでに、一つだけ質問させていただきますけれども、越後平野は信濃川のおかげで美田となったわけですけども、その美田の基となりました大河津分水周辺の写真が1枚も出てこないのに、どうしたのかなという考えを持ったのですが、何かこれには理由がおありなのでしょう。

(弓納持)：実は、信濃川の本には大河津分水も美しさで表現しておりますし、先ほどの木村邸の前に、実はあそこにもう1軒、大河津分水を開削した残土である辺りを基盤整備されたというお宅も豪農としてあるのです。時間があればお見せできたのですが、人工的に造った大河津分水も素晴らしい情景が展開しております。それは間違いないです。

(会 場)：洗堰とか可動堰の周辺の俯瞰の写真がと、余計なことを思ったものですから。

- (弓納持) : 洗堰のところに立って上流を見た時に、信濃川の雄大さをあそこで一番感じることはできないかと思える場所です。
- (会 場) : ありがとうございました。
- (会 場) : この信濃川自由大学、私は上越の頸城に住んでいるのですが、先生は旧吉川町だそうですが、弓納持と言いますと、あそこに福平というところがあるのですが、先生はどちらの方でいらっしゃいますか、余計なことをちょっと聞きますが。
- (弓納持) : まさに弓納持というのは、吉川町福平という集落に 10 軒ほどあります。そこから出ていることは間違いないです。全国で名乗っていけば、その地のつながりです。私の父親の実家は福平です。
- (会 場) : と言いますのは、あそこに遠い親戚がありまして。写真と今の話は全然違うのですけれども、それで先生、本当に素晴らしい写真を見せていただきました。特に新潟地震を 8 ミリで撮られたというのを初めて見せていただきました。先生の解説の中に風景論ですか、先生がカメラマンになられたという風景論、写真を見ながら、そして先生のお話を伺いながら、それは風景論であって人間論であり、先生の人生観と言いますか、生き方と言いますか、そういうものが反映しているように思うのですが、どの写真もすばらしいです。できれば私も、絶版になったそうだけれども、良寛歌詠を是非拝見したいと思っていますのです。と言いますのは、私も小学校の教員をずっとしてまして、寺泊とかいろいろなところを、三島郡からずっと歩いて写真を撮ったのですが、非常になつかしい思いがいたしましたし、弥彦山とか国上山とか角田山とかずっと登ってみましたし、非常に懐かしく、若い頃を思い出させていただきました。ありがとうございました。最後にお聞きしたいのは、先生がカメラマンを目指されたという動機とはいかなるものなのか、ちょっとお聞かせください。
- (弓納持) : 私が小学生ないし中学生の頃、昔、少年雑誌に付録として組み立てのカメラが付いてきました。私の家は本屋だったのです。付録というのは三つか四つくらい余分にくることが多いのです。それをもらって、カメラを組み立てて写真を撮って、現像液もみんな付いてくるものですから、押入に潜り込んで印画紙に焼いたりした時に、これはいい、おもしろいものがあるなど、中学、高校時代に絶対にカメラマンになるのだと、しかも映画のカメラマンか新聞社のカメラマン、昔、ニュース映画を見ますと、車が来て、それをみんなカメラで追ったり、ピカッと光る、それがタイトルバックでした。あのカメラマンになるのだと思っていましたので、それをずっと貫いてきて、幸い、最初になったのが新潟放送、以前は RNK と言いましたけれども、そこがテレビを開局する時に、ニュースのカメラマンとして 16 ミリの撮影機を持って、ニュースを追いかけてもらいました。こんな格好いい仕事をしたいのかしらと、まだ学校出たての若造ですが、そういう仕事をさせてもらいました。でも、そのニュースというのはその日で、今でこそ VTR に残せますけれども、残らないので、何か残る仕事ということでコマーシャル写真に移っていったわけです。
- (阿 達) : 先生は、鳥の目があるのです。というのは、パイロットの免許があるのです。だから、その辺が違うのかなと思っていますのですけれども、今、カメラマンになりたかったとおっしゃっていましたけれども、少年の頃は空を飛びたかったそうです。どうでしたか。
- (弓納持) : できれば、飛行機の操縦を習った時に、ラインパイロットになりたかった。その前に高校生の時もカメラマンかパイロットか、実は高校を卒業する時に、航空自衛隊の願書を取りました。残念ながら身長が足りませんでした。それであきらめて、写真の方をというわけではないのですけれども、私は徹底していつでもああなりたい、こうなりたい、ああいう写真を撮りたい、こういう写真を撮りたい、ああいう人に会ってみたい、こういう人という夢はいつでも持っています。さっき言ったのですけれども、今まで自分はそんなに大きい夢ではないのですけれども、90%以上は自分の夢は実現させています。先ほどの地震の映像、ニュースをやったカメラマンなら、誰でも 1 回は世界的なスクープに出会

いたい、まさにそれがニュースを離れてからですけれども、目の前に起きた。私の周りで見ていた空港から飛び出してきた人たちは、あんなだけだと、あの時、カメラを持って反対に走ったのは、あんなだけだというぐらい、そういう夢を追いかけるというのが一番大事なと、そういう夢の中で信濃川もあったかもしれません。

(会場)：もっぱら風景というか、例えば人物であるとか、あるいは社会派と言われるカメラマンがおりますよね、戦場とかへ行って危険を冒して写真を撮ってくるのがあるけれども、そういうものは手掛けられたことがあるのかどうか、ちょっとお聞きします。

(弓納持)：そういう面では、ベトナム戦争が激しくなった頃、実は地震の年に東京オリンピックがありました。その後に私はマニラ、シンガポール、バンコク、香港と、あの当時、パスポートをもらうのに東京の外務省まで行って、私を外国に連れて行ってくれたスポンサーがいたのです。その人がそれから1、2年たった後にベトナム戦争が激しくなってきた。「弓納持、米軍が記録するカメラマンを募集しているが、お前行くか」と言われた。でも、私はその時既に結婚していたし、先ほどの話ではないけれども、長女も生まれていましたので、一歩踏み出せずにコマーシャル写真をやっていました。でも、コマーシャルをやって、なぜ風景にいったかと言うと、コマーシャルというのは人に頼まれて、人のお金と見る人と、金を払う人のことを意識しながら写真を撮ります。でも、風景は自分のレクリエーションと思っています。すごい風景の中に自分一人での楽しさ、それを記録できる楽しさ、ひょっとしてこういうふうにお見せできる幸せ、そういうもので風景写真を楽しんでいます。ですから、私が山古志の写真がなかったのも、人が大勢行くところに私は絶対いません。いい風景の一人だけで楽しむところに私は佇んでいます。

(会場)：新発田から来ました。写真とはちょっと離れるのですけれども、信濃川ということだったので参加させてもらいました。私は、「塩津潟は塩の道」という本を新潟日報社から出しているのですが、信濃川を物流という面で見ているのです。塩が相当信濃川を行ったり来たりしていますし、それから阿賀野川も荒川も、それから六十里、八十里も相当動いているので、新潟県人は塩の道という糸魚川松本ラインしか分からないのです。塩の道というと、糸魚川と言うのですけれども、これは県知事さんにも新潟市長さんにも、長岡の市長さんにも言っているのですが、是非、塩の道と言った時に、信濃川も入れてほしいのです。私は新発田から来ているのは、この信濃川自由大学で見ると、開催するところは、ここが一番北限なのです。

もう一つ、塩の道と大和朝廷の城柵を調べているのです。そうすると、淳足柵、磐舟柵、もう一つ塩塚あたりに都岐沙羅柵という三つ目の柵があるのです。そうすると、内水面交通があると、どうしても大和朝廷は信濃川に降りてきていますから、そのことから考えても、是非、内水面交通、物流についての信濃川にもっと触れてほしいのです。信濃川と言った場合には、新潟市が合併すると、豊栄市が合併しているために、新発田市と隣接するのです。豊栄市の福島潟というのは、信濃川と密接な舟運の関係があるので、向こうの方々は信濃川と言うと、かなり親近感があるのですけれども、北陸弘済会も、何しろ何でも新潟市で止まってしまうのです。

(阿達)：新潟西港をもって信濃川は一応完結していますので、水系としてはかなりあるのでしょうけれども、ただ今回、水運だとか流通についての話は、これからの三条でやることにはなっているのです。残念ながら、これから阿賀北の方にはまいりませんが、改めて。

(会場)：また来年でも再来年でもいいですので、阿賀野市か新発田市か、村上市等でも是非やってもらいたいという要望が一つ。

もう一つは、私は塩津潟という潟名で調べているのですが、新潟県人は紫雲寺潟と言ってしようがないのです。本当の名前は塩津潟なのですが、そういう観点から信濃川を見た時に、千曲川が新潟県

に入ると妻有川になっているのです。十日町の合併の時に、十日町がふりだしだったので、十日町市ではなくて妻有市にしたかったという希望が非常に多いというのです。それほど十日町地区では妻有という、妻有川には思い入れを持っているわけですが、新潟県に入ったら妻有川になってずっと新潟市までくるまでと思いきや、いつの間にか信濃川になっているのです。弘済会あるいは信濃川工事事務所に聞いても、いつ、どういう理由で信濃川になったのかというのが分からないのです。あんたが調べてよという程度で。だから、是非、千曲川がずっと千曲川で新潟までくるならいいですけども、妻有川という時代があるにもかかわらず、それにかかわった民族もいるのに信濃川になったいわれがはっきりしないのは、どうも納得がいかないのです、是非、お願いしたいと思います。

(阿 達) : いわれについては、ここで発言するわけにはいかないですけども、ただ、ある人が言っていましたけれども、日本一の大河という形で言うならば、信濃の国から流れて越後の新潟に流れ着くほどの長い川なのだという意味では、長野も新潟も長いですよ。それだけの川だという意味では、それこそ妻有川、越後川もいいですけども、敵に塩を送るわけではないですけども、塩のない長野か何かからわざわざ新潟に来てくれてごころうさんという意味で、信濃川の名前を借りてもいいのではないかと思っています。

(会 場) : それで、今年、潟と文化を語るフォーラムというのがあったのです。その時に私はパネラーで行っていたのですが、長野県知事さんは長野県ではなくて、信濃県にしたいという動きがあるのです。県民も65%くらいの賛成があるのです。

(阿 達) : 信州とかですね。

(会 場) : そうなった時に、信濃県になると新潟県は困るなという気があったので、先の先まで見通した対応をしてもらいたいと思っているのですが、よろしくをお願いします。

(阿 達) : 国土交通省の方もおられますので、分かっているかと思いますが。時間もまいったようなのですが、この辺でよろしゅうございましょうか。今日はどうもありがとうございました。

(司 会) : 弓納持先生、阿達編集委員、ありがとうございました。皆様、盛大な拍手をもう一度お願いいたします。

以上をもちまして、我ら信濃川を愛する～信濃川自由大学、第2回講座を終了いたします。本日は、長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

過去の議事録は信濃川水系ホームページ (<http://www.367.jp/>) に掲載しております。

そちらも是非ご覧下さい。

なお、ホームページをご覧になれない方は下記までご連絡ください。

(社)北陸建設弘済会 長岡支所 棚橋

〒940-0861 長岡市川崎町 2249-1 TEL (0258) 32-3484 FAX (0258) 32-3351